

式 辞

北国からも花の便りが届くようになり、木々も日ごとに青さを増すようになってまいりました。まさに命の躍動を感じる春を迎えましたが、東京農工大学連合農学研究科の大学院生として本日の入学式を迎えられた七十名の皆様も新たな人生の春を迎えられました。おめでとうございます。伝統ある連合農学研究科の一員になられた皆さんを心から歓迎いたします。また、これまで側面から皆さんを支え、この日を待ちわびてこられたご家族の皆様をはじめとした関係各位のお喜びもひとしおと思います。心よりお祝い申し上げます。

本日は、連合大学院を構成する茨城大学および宇都宮大学のそれぞれの学長である菊池龍三郎先生および菅野長右エ門先生、連合農学研究科長である國見裕久^{やすひさ}先生をはじめ、各構成大学の農学部長、理事・副学長等関係の方々のご臨席を頂いております。我々一同、新入生の皆様に心より歓迎いたします。

本年度の新入生の中にはアジア、アフリカの十一カ国からの留学生二十六名が含まれております。留学生の皆さん、言葉も習慣も異なる日本における生活は、何かと苦労も多いかと思いますが、一日も早く日本での生活に慣れ、研究に専念していただきたいと思っております。

当連合農学研究科は茨城大学、宇都宮大学、それに東京農工大学の三大学が協力して一九八五年四月に設立したもので、既に二十三年の歴史を持ちます。その特徴は三大学の充実した教授陣が協力して学生指導にあたることにあります。農学は実学的応用科学ですから、単に一つの専門分野に関して、深い専門知識を体得するだけでは不十分です。広い視野に立って課題に立ち向かい、判断できるようになることが肝要で、農学全般に関する広い知識も修得する必要があります。今、環境問題や食料問題、エネルギー問題など、人類の生存を脅かす複雑な難問への取り組みに大きな期待がかかっていますが、それには、高度な専門知識が必要とされることは勿論ですが、それだけで取組めるものではなく、関連分野の広い知識が要求されることが少なくありません。連合農学研究科においては、三大学にまたがるバラエティに富んだ多数の教員から教育研究指導を受けられることを最大の特色としており、事実、これまで視野の広い一流の研究者を多数育成してまいりました。皆さんには連合農学研究科の特徴を最大限活用し、視野の広い研究者となり、地球規模の重要課題の取り組みに中心的役割を果たしうるリーダー的存在として成長していただきたいと思っております。

さて、皆さんには世界に通用する一流の研究者を目指して学位論文に取り組んでいただき、

かつ広い分野の知識の吸収に勤めていただきたいと思います、その目的を達成するには何事にも主体的に取り組む姿勢が大切であることを忘れないでいただきたいと思います。私の好きな言葉に相対性理論で有名なアインシュタインの次の言葉があります。

「学べば学ぶほど何も知らないということがわかるようになる。

何も知らないと分かるようになるほど学びたくなる。」

皆さんは今、将来の研究者としての自らの姿を想像し、それを目指して頑張ろうと希望に燃えていることと推測しております。このアインシュタインの言葉は大きな仕事をする研究者に必要な姿勢について述べたものです。皆さんには自らの内から湧き出る研究への意欲を何時までも持ち続けていただきたいと思います。

もう一つ、中国・春秋時代の思想家である孔子の言葉に、研究を進める上で重要な示唆を与えるものがあります。それは、

「学^くびて思^あわざれば則ち^く罔^らし。思^あいて学^あばざれば則ち^あ殆^あうし」

というものです。講義などを通して色々な知識を吸収し、研究上必要な多くの文献を読んだとしても、それに基づいて常に思索をめぐらさないとその知識は身に着いたものにはならないし、逆に、一人で思索するだけでは独善的なものになってしまう、という戒めの名言です。「学^くびて思^あい、思^あいて学^あぶ」という姿勢を常に忘れないようにすることが重要です。博士後期課程においては手取り足取りで指導されるのではなく、自ら進んで考え、調べ、失敗を通して学びつつ前進する姿勢こそ大切です。そこでは苦しみを味わうことがあるかも知れませんが、その道程の先に新しい「知」が皆さんの手によって生み出されることとなります。素晴らしいことではないでしょうか。その喜びを是非体験して下さい。

次は、グローバル化の時代に相応しい国際的教養人としての素養を在学中に身につけてほしいということです。世はまさにグローバル化の時代です。皆さんが大学卒業後に活躍する場はグローバル化した世界です。種々の歴史、文化、伝統を持つ様々な国の人々との交流が日常的なものになっております。皆さんにはそのような社会で活躍することが期待されます。そこでは、コミュニケーションの手段としての英語の重要性は勿論ですが、歴史も文化も異なる国々の人々と親しく交わるには、広い教養に包まれ、心と心の触れ合いができるようにならなければなりません。皆さんが尊敬している人を思い出して下さい。その方は単に専門分野で優れているだけでなく、音楽や絵画などの芸術や、スポーツ、あるいは伝統芸能に通じ、歴史や文化への造詣も深いなど、自身の専門とは別の世界を併せ持っている人ではないでしょうか。そして単に博学であるだけでなく、その分野を体得し、それによって新たに創造的な理解力や知識を身につけた状態になっていると思います。その状態こそ教養というわけです。教養を身につけることそれ自身、自らの心を豊かにしてくれるものでもあります。教養は人柄に深みを与え、人との強い絆を結ぶ強力な触媒の役割を果たすものです。一つの仕事を成し遂げるにも、多くの人で構成されるチームが協調して動かなければならず、それにはチーム内の人々の間に強い

絆が確立しているかどうかは鍵を握るといってもよいでしょう。皆さんには仲間を惹きつける魅力に富む教養人となって社会をリードできる研究者になっていただきたいと思います。学生時代は、自由に使える時間を豊富に持てる貴重な時期です。潤沢な時間は学生の特権でもあります。これをフルに活用し、教養を深め、グローバル化の時代に相応しい国際的教養人としての自分自身を磨く努力をしてほしいと思います。

以上、これからの皆様の連合農学研究科における学園生活が実り多いものになることを願い、皆様への私の期待について述べました。本日の希望に満ちた気持ちを忘れず、何事にも自発性と行動力を持ってあたる積極的な学園生活を送って下さい。皆さんが多くの新しい「知」を生み出し、明日を担う研究者として大きく成長されることを期待いたしまして、式辞と致します。

平成二十年四月十一日

東京農工大学長

小 畑 秀 文